

(要約版)

八溝山地における煙草生産に関する技術史的研究

助成研究者 上野修一（栃木県立博物館学芸部長）

共同研究者 篠崎茂雄（栃木県立博物館学芸部人文課）

今回の研究の主題は、2つに大別される。

まずは栃木県東北部の八溝地方における、江戸時代末から明治時代にかけての煙草栽培の歴史の特徴を明らかにすることである。

19世紀前半、現在の栃木県那須郡那珂川町大山田周辺の地域は、水戸藩の手厚い保護もあって葉煙草の一大産地として知られ、江戸で約3割の市場を占めるほどであった。しかし19世紀中頃、利益を追求するあまりに粗悪品を流通させた結果、市場の信用を失い評価が下落した。明治時代になっても国内市場での復活が容易でなかったため、この地域の篤志家たちは横浜港からの輸出に活路を見いだそうとしたが、国内産煙草は欧米人の嗜好に合わず失敗した。同じ頃、明治政府は殖産興業政策の一環として、外貨獲得のために米国や露国などの外国産煙草栽培に意欲を見せており、明治12年には熊本県阿蘇郡に国立の栽培試験場を設立、岡山県など5県から篤農家を集めて研修を開始するなど、積極的な政策が展開されている。

明治14年、試験場は岡山県阿賀郡草間村（現・新見市）に移設されているが、この研修に栃木県から選抜されたのが那須郡大山田下郷出身の屋代嘉之助である。屋代は岡山での外国産煙草栽培実験の様子を日記と図面で詳細に記録しており、当時の外国産煙草栽培試験の様子を今に伝える史料として高く評価できる。具体的には試験場の所在地、施設、組織、苗床の概要、播種及び発芽状況、病害への対応、本畑への植替、現業の内容－地区・種類・反別・耕耘・栽殖・培養・採虫・生育土寄・摘芽・留茎・収穫－、施肥・栽殖方法、基本肥料、苗床用肥料、本畑収穫量葉数、苗床収穫量、土葉収穫数・伸葉明細表、本葉伸葉明細表などが収録されている。その後、明治20年までは、帰郷した屋代を中心に煙草の栽培及び製造技術の向上を目指して、地元の有志が積極的に試験所や講習所の設置を国に要望した結果、町田呈蔵が派遣されることとなった。外国産煙草の栽培も奨励され、「ハバナ種」が試作され好結果を得たことが報告されている。しかし、外国産煙草栽培は技術的に可能になったものの商品としては普及せず、馬頭地域においては数年にして大山田在来種及び「だるま種」の栽培が他を圧倒している。その理由については、今後の課題としたい。以後、明治30年に煙草の専売制が導入されてからも栃木県の八溝地方を中心に「だるま種」は盛んに生産され、大正年間には全国一の生産量を誇るまでに成長した。

歴史的に見た場合、外国産煙草栽培は定着しなかったが、地元の有志が改善目標を掲げて積極的に栽培技術の研究と実践活動を行ったことが地域の煙草栽培農家の改善意識に反映され、八溝地方における煙草栽培発達の大きな要因となったことを指摘しておきたい。

次は、現代の栃木県那珂川町健武における葉煙草生産の様子を調査するとともに、映像で記録した。そこでは、伝統的な「だるま種」（第三在来種）を生産しているが、今日の日本ではほとんど見られない貴重な品種の栽培記録である。映像で紹介した「葉のし」は、刻み煙草にするもので、江戸時代から続く伝統的な作業工程である。

なお「つくば1号」（第4黄色腫）、「たいへい」（第1バーレー種）の栽培についても聞き取り調査し、生産歴としてまとめた。

ほかにも福島県二本松市の松川葉、岡山県高梁市の備中葉、徳島県徳島市の阿波葉に係る資料調査にも着手したので、今後とも機会あるたびに継続していきたいと考えている。

最後に、こうした調査の機会を与えて頂いた公益財団法人たばこ総合研究センターに対して、深甚なる感謝の意を表します。